

# ハンドボール競技における戦術的能力の規定因子について

## —女子トップレベルの指導者の視点から—

栗山 雅倫<sup>1)</sup> 藤本 元<sup>2)</sup> 田村 修治<sup>1)</sup> 藤井 壮浩<sup>1)</sup> 陸川 章<sup>1)</sup>

### I. 緒言

競技スポーツにおいて、高度なパフォーマンスの発揮のために、技術の正確な遂行が求められる。また、球技種目のプレーヤーにおいては、その競技特性から、技術の正確な遂行に加え、状況の判断や、敵や味方の動きに応じる（會田, 2006a）といった、いわゆる戦術的な要素が一般的に重視されているのが実情である。

実際の競技場面においては、絶え間なく要求される状況の解決に際し、技術の遂行そのものの正確性もさることながら、状況に応じたプレーを選択し、行動していく能力が、ゲームを通じて質・量ともに時に優先的に求められる傾向が明らかである。それに呼応して、戦術達成力、戦術的思考力などといった、戦術的な諸能力について、スポーツ科学の領域で多く議論されている。

しかしながら、トレーニング実践現場において、戦術的な諸能力の向上へ向けたアプローチは、必ずしも一定の見解を得ておらず、たとえばフィットネス能力向上へのスポーツ医学的立場からの貢献に見られるような、学術的アプローチのトレーニング実践現場への活用については十分とは言えない。

ハンドボール競技において、他の球技種目と同様に、戦術的な能力の向上は、高いパフォーマンスレベル獲得に向けて極めて重要である。そしてその能力を高めるためには、これまでにもいくつかの試み（栗山, 2006；栗山, 2008；栗山, 2009；栗山・辻, 2010）に見られるような、戦術的な能力の規定因子を明らかにする必要が考えられる。

戦術的な諸能力について、會田は、個人戦術力は一般に戦術的思考力と技術力に規定される（會田, 2006b）とし、球技における個人戦術力の重要性について説明している。本研究においては、會田の個人戦術力の定義を参考にし、戦術的な能力の一つとして、状況解決能力をあげ、“的確な判断のもとに行動する能力”として定義することとした。

### II. 研究目的

トップ指導者の戦術的能力向上に向けた指導のコツを探ることにより、競技あるいはトレーニング現場に提供することは、効果的な指導の一助となる知見となることが見込まれる。そこで本研究では、ハンドボール競技のトレーニング実践現場における、戦術的な能力の捉え方についての見解を、トップ指導者から得ることにより、臨床的に戦術的能力の規定因子を検討する素材を導き出すこと、そして、各指導者の見解の一致や相違から、戦術的能力を捉えるための留意点を検討することを目的とした。

### III. 研究方法

トップ指導者へのインタビュー調査を実施の後、調査結果の整理をし、個別の認識をまとめた上で、捉え方の一致・相違を確認し、得られた調査結果より、規定因子を検討する素材及び留意点について考察を展開することとした。

#### 1. インタビュー

##### 1) 対象者

トップ指導者として、国内トップリーグである、日本ハンドボールリーグ女子リーグ全6チームの、各チーム指導者6名（A.B.C.D.E.F）を対象とした。

インタビュー実施を依頼するにあたって、事前に研究の趣旨を説明し、あらかじめ同意を得た上で、実施までにラポールの形成に努めた。なお、インタビューは、“東海大学「人を対象とする研究」倫理委員会”の承認を得て実施した。

##### 2) 実施方法

インタビューフォームの作成をすることで、質問内容や進行の統制をはかった。なお、実施環境は、スムーズなやり取りができる工夫を施した。

1) 東海大学 2) 筑波大学

### 3) インタビュー内容

インタビュー内容は、状況解決能力の規定因子を検討することを目的とし、大きく3つの領域に分けて設定した。

#### (1) 重要性について

状況解決能力は“重要である”あるいは“不可欠である”ことを検証するために設定した。また、どのように重要であるかについても質問項目として設定し、重要性の理由なども確認した。

#### (2) 具体的状況について

状況解決能力を見極める要素について質問することで、規定因子を導き出すための手掛かりを得ることをねらいとし、設定した。

#### (3) トレーニング手段について

トレーナビリティの可否に対する考え方を導き出すことと、規定因子を導き出すための手掛かりを補助的に得ることをねらいとし、質問項目とした。

## 2. テキストの生成と分析

得られた記録から逐語録を作成し、逐語録の分析を通し、サマライズメモを作成した。これらの作成にあたっては、妥当性、信頼性の保障のために、複数の験者により内容の確認を実施した。

## IV. 結果

### 1. 状況解決能力の重要性

全対象者より共通して得られた回答は「重要度の認識は異なりながらも、必要にして不可欠な能力である」であった。また、その他、「イメージの共有が大切である」こと、そして「技術遂行能力が状況解決能力の基盤になる」ことがあげられた。

以下に、各インタビュー対象者の主な回答を示した。

- A) 状況判断には、メンバーとの見解の一致が大切で、チームとしての状況の捉え方に基準を設けるべきと考えている。
- B) 特定のポジションに必要なものではなく、全体が重要。状況の共通理解がはかれていることが状況解決にとって不可欠である。
- C) ポジションによって重要度は異なると思われるが、いずれのポジションにおいても最も重要な能力である。
- D) 状況解決能力は必要であり、判断力は経験により培われる。また、基盤となる能力として、技術遂

行能力は極めて重要である。

- E) 前提条件として高い体力レベルを保持した上で、意識の活性化された選手が、高い状況解決能力を示す。
- F) 自分がどう解決したいかというイメージ、コンピネーションの場合は、イメージの共有が大切である。

### 2. 評価できる状況

全体としては、「様々なゲームの状況を抽出し、評価できる」という回答が得られた。その他、「いかに空間を認識できているか」や「ゲームの流れに対する行動の妥当性」さらには「数的優位の気づき」などといった、戦術的思考力や状況認知などに関わる回答が得られた。

以下に、各インタビュー対象者の主な回答を示した。

- A) ゲームの流れの中で、状況に求められる行動の妥当性の観察により評価できる。空間的な局面としてはポストとの2:2などが評価しやすい。
- B) 個々の能力によって異なるが、全ての状況に判断が伴うのがハンドボール。その時々がいかに空間を認識できているかを評価する。
- C) ポストとの2:2の局面において、能力が評価できる。また、ゲームの流れに対する行動の妥当性も評価できる状況と捉えている。
- D) 状況解決能力は、基本的に自分のパフォーマンス能力を基にした相手との相対関係で成立する。
- E) 人間性も含め、ハンドボール以外の場面においても、もとなる能力は評価できる。
- F) 状況解決能力の評価は、シンプルな状況でいうとシュートかパスかの判断や、2対1(数的優位)の気づきで行うことができる。

### 3. トレーニング手段

全体に共通することは、「ゲームにおける、ある状況を作り出し、分習的に実践する手段」があげられた。その他、「あらゆるトレーニングに判断の要素を含む配慮をしている」といったことや「ゲームの時間帯を考慮したトレーニング手段の準備」もあげられた。また、「技術遂行能力や身体的能力を向上させるトレーニング手段」を十分に準備することが、前提として大切であるといった回答も得られた。

以下に、各インタビュー対象者の主な回答を示した。

- A) 特にポストとの2:2の局面は、判断トレーニングの材料として頻繁に使う。また、ゲームの時間帯における行動も抽出しトレーニングする。
- B) ほぼすべてのトレーニングに判断の要素を含む配慮をしている。
- C) ゲームの要素を含むトレーニングが大切。すべてのトレーニングに判断の要素を含むことを念頭に置いている。
- D) 前提としての技術遂行能力や身体的能力を向上させるトレーニングが重要である。
- E) 高い体力レベルを獲得するトレーニングをこなすことを前提とし、ゲームの中で培う。
- F) コーチの作る環境（練習・ドリルの内容、指導のアプローチ、言葉掛け）などによって、トレーニングすることができる。

#### 4. 指導者間の一致点と相違点

以上、得られた結果から、各指導者間の一致点としては、状況解決能力は重要であり不可欠であるとし、その評価はゲームの様々な状況で行うことが可能であるということだった。また、状況解決能力の向上に向けては、ゲーム状況の抜粋によるトレーニングが適しており、そのトレーニングを通じて、トレーナビリティは期待できるということであった。

一方、各指導者間の相違点としては、状況解決能力を包含する戦術的能力に重要な要素として、戦術的思考力を重視する指導者と、技術力を重視する指導者が混在しており、双方の重要度の捉え方に相違があるといった結果が得られた。なお、いずれにしてもトレーナビリティは期待できると捉えることが出来た。

## V. 考 察

### 1. 戦術的能力の重要性について

本研究の結果より、表現の違いはありながらも、今回のインタビュー対象とした、いずれの指導者においても、戦術的能力の重要性を認識していること、また、それぞれの指導者が、その重要性を認めながらも、トレーナビリティやトレーニング方法について一定の見解を見ないことが明らかとなった。

いずれの競技種目においても、“ドリル”として称されるような、トレーニング手段の一般化がなされる場合が少なくない。とくに技術性の向上に方向づけられたトレーニング手段は、様々な指導書等に頻繁に見ることが出来、同様のことが、体力的要素の向上に向

けられたトレーニングについても言える。これらに共通してみられる傾向として、能力の評価が、数値として、あるいは形而的に明確にできる傾向が高い。一方で、戦術的なトレーニングの評価は、定量的に評価することが困難で、感覚的にその能力を評価するケースが多く、指導者によっては先天的な要素が非常に高いと捉えていることが、本研究のインタビュー調査からもうかがえた。

しかしながら、戦術的能力は、そのすべてが生得的でないことは明らかであり、例えば指導者により、ある状況の解決に向けた知識の提供が、その状況解決に大きく寄与していることは実戦場面において容易に認めることが出来る。本研究のインタビュー調査においても、指導者全般において、戦術的能力の評価は、質的なものに限定された回答を得たが、インタビュー対象者Fは、「指導者の作る環境などによってトレーニングすることが出来る。」としており、高いトレーナビリティを期待していることがうかがえる。また、その他のインタビュー対象者においても、トレーニングにおける戦術的能力の向上を明確に期待しており、特に戦術的思考力について、先天的と捉える指導者が多いながら、戦術的能力のトレーナビリティを認めていることが示唆された。

これらより、先天的要素も高いと捉えられる戦術的能力は、トレーニングによる可変性が、たとえ小さいとしても開発する価値があると、指導者が認識していることが推察できる。

### 2. 戦術的思考力と技術力

球技におけるパフォーマンスにおいて、技術が単体で発揮されることは極めて少ない。視覚の働きが重要な役割を果たす“オープンスキル”に対する、身体内の固有受容器による知覚が重要な役割を果たすとされる“クローズドスキル”（後藤, 2006）にしても、判断等の何らかの思考が伴うことは事実である。

個人の戦術的能力を、戦術的思考力と技術力に分類する（會田, 2006b）ならば、本調査においては、それを支持する結果が得られたことが推察できる。状況解決能力の評価では、その思考過程について言及するインタビュー対象者が多かったが、トレーニング手段については、前提条件としてみなす技術力のトレーニングや、さらにその下位成分とみなす体力的トレーニングを上げるインタビュー対象者も見られた。ここから、指導者は、技術力の向上が状況解決能力、すなわち戦術的能力の向上に貢献することを経験知として有

していることが示唆された。

### 3. 戦術的能力の規定因子

今回対象としたトップ指導者の見解から、戦術的能力の規定因子について、以下の因子の必要性が推察できた。

#### 1) 状況の認知と判断

的確な状況の認知と、それに基づく的確な判断によって、状況が解決されると考えられる。

##### (1) 空間の認知

プレーできるスペースや、数的優位性等を認知できる能力が求められる。

##### (2) 状況の認知

“スクリーンが成立している”などの状況について認知できる能力が求められる。

##### (3) 認知した状況へ対処するための知識

状況を解決するために、有効な方法や、その理由などについての知識が必要となる。

##### (4) それらに基づいた判断

統括的に状況を認知し、行動を選択する判断が優れていることが求められる。

#### 2) 技術の遂行能力

戦術的能力の規定因子として、主に得られた回答より、状況の認知や判断に関する能力が特に重要であることが示唆されたが、他にあげられた要素として、技術を遂行していく能力の高さが重要であることが推察される。

#### (1) 選択する技術を高める

知識に基づき、的確な判断のもとに遂行された技術でも、その動き自体に問題を有していたり、高レベルで実施されなければ、状況の解決は困難になるため、技術のレベルの高さが重要となる。

#### (2) 優れた技術遂行のための身体的能力の確保

高い技術レベルの確保には、動きを支えるための身体的能力を有する必要がある。

### 4. ハンドボール競技における戦術的能力評価に適した状況

ハンドボール競技において、特に戦術的能力に適した状況として、ポストプレーヤーの介在する状況があげられた。ポストプレーヤーは、防御プレーヤーの間に位置しており、図1の状況のように、いずれの防御プレーヤーによってポストプレーヤーをマークすべきかは、ボールを保持する攻撃プレーヤー(a)の行動によって変化することが一般的であり、ポストプレーヤーの存在が防御プレーヤーによる攻撃プレーヤーのマーク形態を複雑にする。そのため、図1に示すような状況は、戦術的思考力の高低が、状況の解決に、より影響を及ぼすことが考えられる。

一方、技術力の観点においても、ポストプレーヤーの介在する状況における戦術的能力評価が適切であることがうかがえる。この状況において、例えば図1におけるボールを保持するプレーヤー(a)により、シュートによる得点のほか、ポストプレーヤーへのアシスト、あるいはそれらを利用して他のプレーヤーへのアシストといった、1対1の状況の解決と比較し、より

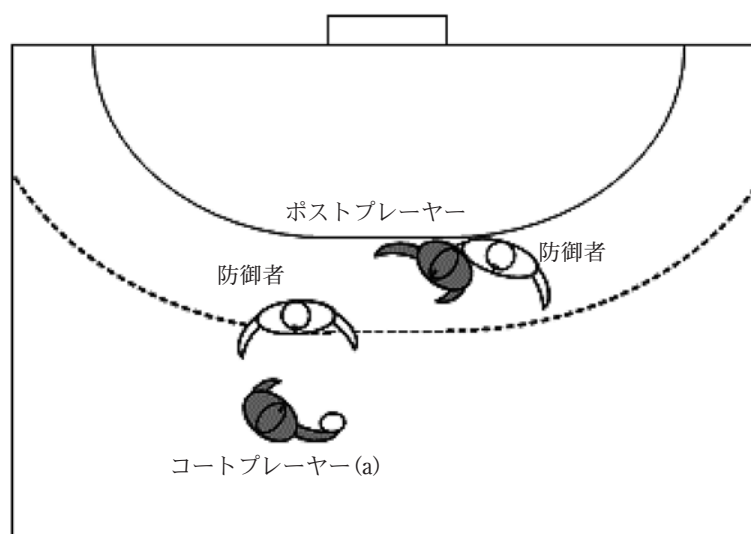


図1 ポストプレーヤーの介在する2:2状況

多様な技術の遂行により解決することが可能である。いわば、より多くの技術に習熟していることが、より多彩な状況の解決につながるが考えられ、解決方法が多彩なほど、対峙する防御プレイヤーにとって、攻撃意図の予測を困難にする可能性が考えられる。

これらより、ハンドボール競技における攻撃プレイヤーの戦術的能力を評価するために適した状況として、ポストプレイヤーの介在する状況があげられると推察できる。

## VI. まとめ

本研究において、トップ指導者の戦術的能力に関する捉え方は、以下のようにまとめられる。

- ・戦術的能力の重要性は高い。
- ・トップ指導者は、その能力を見極める状況や観点を有している。
- ・戦術的能力の構成要素として、戦術的思考力と、技術力の双方が必要である。
- ・戦術的能力は、トレーナビリティがある。

そして今後の課題として、戦術的思考力や技術力を

いかなるバランスで求められるかを検討することや、それらのトレーニングを検討することがあげられる。これらは、科学的・客観的分析、あるいは事例研究的にも検討される必要があると考えられる。

## 文献

- 會田 宏 (2006a) 球技の戦術. (社) 日本体育学会監修. 最新スポーツ科学事典. 平凡社: 東京, pp178-179.
- 會田 宏 (2006b) 個人戦術. (社) 日本体育学会監修. 最新スポーツ科学事典. 平凡社: 東京, p179.
- 後藤幸弘 (2006) 球技の戦術. (社) 日本体育学会監修. 最新スポーツ科学事典. 平凡社: 東京, p166.
- 栗山雅倫 (2006) 個人戦術能力評価に関する考察～ハンドボール競技「1対1局面に着目して」～. ハンドボール研究, 第8号: pp92-95.
- 栗山雅倫 (2008) 個人戦術能力評価に関する考察～ハンドボール競技. 防御局面に着目して～. 東海大学スポーツ医科学雑誌, 第20号: pp15-21.
- 栗山雅倫 (2009) ハンドボール競技における占有エリア解析法による攻撃能力の評価. 東海大学スポーツ医科学雑誌, 第21号: pp7-13.
- 栗山雅倫・辻 昇一 (2010) ハンドボール競技における戦術的判断時期とパフォーマンスの関係について. 東海大学スポーツ医科学雑誌, 第22号: pp29-35.

